発表 No.実４　　**実践発表**

多様な言語文化背景をもつ子どものための国語科教育実践
―自身の経験を捉え直し可能性を伸長するための一提案―

河合さよ子（京都教育大学大学院生）

1.　実践の対象

近畿地方の中学校に付設された帰国生徒学級１年生 13 名を対象とした。彼らの課題は以下の二点である。①国・地域間を移動したことによって言語や文化の違いに直面し、困難を乗り越えようとしたという経験を自身の強みだと捉えていない点。②できないことに目が行きがちで学習場面において自己表現ができず、自己肯定感が低い点。

以上の課題をふまえて、単元「方言と共通語」「随筆二編」実践の目的を設定した。

2.　実践の目的

本実践の目的を「自身のことばや経験を捉え直して価値を見いだすこと」に設定した。「方言と共通語」については、言語はそれぞれに文化を担っており、「いろいろな言語を知っている」ということは、「いろいろな文化に触れることができる」ということである。その豊かさと価値を改めて実感してほしい。そこで、方言と共通語の関係が、生徒がもつ言語同士の関係と同じ関係である点に着目し、方言と自分のもっている言葉を相似的に捉えられるようにした。

「随筆二編」では、やまだ（2000）をふまえ、彼ら自身が過去に経験したことを改めて取り出し、その経験から何を感じたのかを自分のことばで整理することで、自分なりに価値を見出せるのではないかと考えた。「自身の経験を自分の言葉で語り直す」という経験の捉え直しを通して、自分のもっている価値観を見つめ直してほしいと考えた。

3.　実践の内容

3.1. 実践Ⅰ「方言と共通語」（全２時間）

この単元では、ことばの豊かさはものの見方の豊かさとつながっているということ、ひいては、生徒たちは複数言語を知っているため、それが豊かなものの見方や考え方につながっていることに気付くことを目標とした。第１時では、導入で方言の例を出し、方言と共通語の説明を行った。授業者が自身の方言に関する体験談を話し、生徒が今までの言語体験を思い出せるように働きかけた。次に、生徒自身が普段どのような言葉を使っているか表にまとめた。それをふまえて第 1 時の振り返りを書かせた。第２時では、様々な地域の方言を紹介し、「方言の豊かさ」に気付くように働きかけた。工夫としては、普段自分が使っている言葉を表にまとめさせることで、無意識のうちに場面や相手に応じて使用する言葉を使い分けていることに気付かせた。また、「方言の豊かさ」にあらわれるのは多様なものの見方や文化の豊かさである。すなわち、複数言語を知っているということは文化的に豊かであると考えられるため、その価値を実感させたいと考えた。

3.2. 実践Ⅱ「随筆二編」（全６時間）

ねらいを「①経験を捉え直して価値を見いだす」「②書くことで成功体験をする」に設定した。まず第１時で「空」、第２時で「えんぴつ」を読み、それぞれ「筆者が工夫している点」を発表させた。第３時以降の書く活動では、テーマを「海外にいたとき、現地の人との関わりの中で心

に残った出来事」に設定し、第１・２時の読みを生かして随筆を書かせた。読む活動では、「自分たちが随筆を書くときのために、筆者のアイデアを盗もう」と働きかけ、「書くための読み」という視点をもたせた。書く活動においては、「書けた」という成功体験をさせるために、「書くこと」に対する抵抗感を減らすことが必要であると考えた。そのため、自分自身の過去の経験を語るという身近なテーマに設定した。また、いきなり書き始めるのではなく、書きたいことの整理をさせるためにロイロノートを使って「材料集め」をさせ、そのときの状況や、自身が何を考えたのかを丁寧に振り返らせた。

4.　生徒の様子

「方言と共通語」の振り返りで、「色々な言葉を持つことで、物事への「見方」、「価値観」、「考え方」などの「視点」を多く持つことができ、とてもいいと思います。」と答えた生徒や、「僕は今回の授業で、方言や他言語を話せることはすばらしいことで、尊重すべきことだということを知りました。共通語は、全国で通じて便利ですが、方言ならではのよさもあると思います。これからも、方言や他言語を尊重したいと思います。」と答えた生徒がいた。いずれも目標に近いが、そう考えた具体的な自身の経験を語ることができるよう働きかけを工夫する必要があった。

「随筆二編」の読みの活動では、授業者の想像以上に多くの意見が出され、生徒たちは言葉による見方・考え方を働かせることができた。書く活動では、自身のルーツを否定的に捉えていた生徒が、自身の過去を語ることに対して非常に前向きに取り組む姿が印象的であった。他の生徒も、自身の過去を丁寧に振り返り、言葉にしようと試行錯誤しながら取り組んでいた。この単元に関しては目標を達成できたといってよいのではないだろうか。

5.　考察

今回の実践で、生徒たちは方言と共通語の関係を、自身がもつ言語同士の関係に当てはめて考えたり、作品において筆者の工夫を読み取る際、非常に多様なものの見方や考え方を働かせながら考えたりすることができた。また、自身の経験を捉え直し・語り直すことで、自身の過去を認めることにもつながったのではないだろうか。

帰国生徒の今までの経験は、教師からすれば「経験して当然のことではない」が、帰国生徒からすれば当然のことであり、その経験を通して培った資質に気付けないことが多い。そのため、教師が意識的に経験を掘り起こし、積極的に働きかけをしなければならないと改めて感じた。

【引用文献】

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味ーライフストーリーの心理学」『人生を物語るー生成のライフストーリーー』ミネルヴァ書房